

平成二十年九月二十七日（土）

第三八三回 史跡めぐり

織都

桐生を訪ねる

素敵旅



第三八三 史跡めぐり

”織都“ 桐生を訪ねる素適旅

日 時 平成二十年九月二十七日（土）

集 合 越谷駅東口広場午前7時二十分

コース 越谷駅 → 太田駅 → 桐生線 → 新桐生駅 →

駅前より バス → 群馬大学工学部（重要文化財）：

天満宮・坂口安吾往還碑・翁藏（見学）

ノコギリ屋根・有隣館（昼食・からくり人形芝居）

織物参考館「紫」（資料館及織物実演）：


淨運寺（法話・宝物拝観）：

バス停→新桐生駅 → 太田駅 → 久喜駅 → 越谷駅

参加費 三千八百円（交通費・入館料・資料・保険料含む）

案内者 常任理事 菅波昌夫





◆ 桐生市

群馬県の東南部に位置し、渡良瀬川と桐生川が流れ山々が屏風状に連なり、水と緑に恵まれた地に、歴史と伝統が息づいている。

古くから織物の街として発展してきた桐生市は大正十年（一九二一）に全国八十四番目の市として誕生した。幾多の市域の変遷をへて面積も二倍に拡がり平成十九年推計十三万となり、この恵まれた自然と織都千三百年の歴史と伝統が醸し出す落ち付いた町並みを作っている。

現、桐生の市街地は江戸初期の代官、大久保長安の手代大野八右衛門が荒地の下久方、荒戸の両地を開墾し桐生新町の町割に由来する。

桐生の織物は奈良時代の初期には絹織物として朝廷に献上し江戸時代には西の西陣・東の桐生と謳われ織物の一大産業を今に伝える、ノコギリ屋根の工場や土蔵が多く残っている。

桐生は今でも織物の糸へんで生きる町で紋御召もんおめしと帶地を中心に銘仙服地を生産している。

近年の基幹産業として、自動車部品や電気機器を中心とした工業が急速に発達し、パチンコ機械製造では全国シェアの一七〇%を占めている。

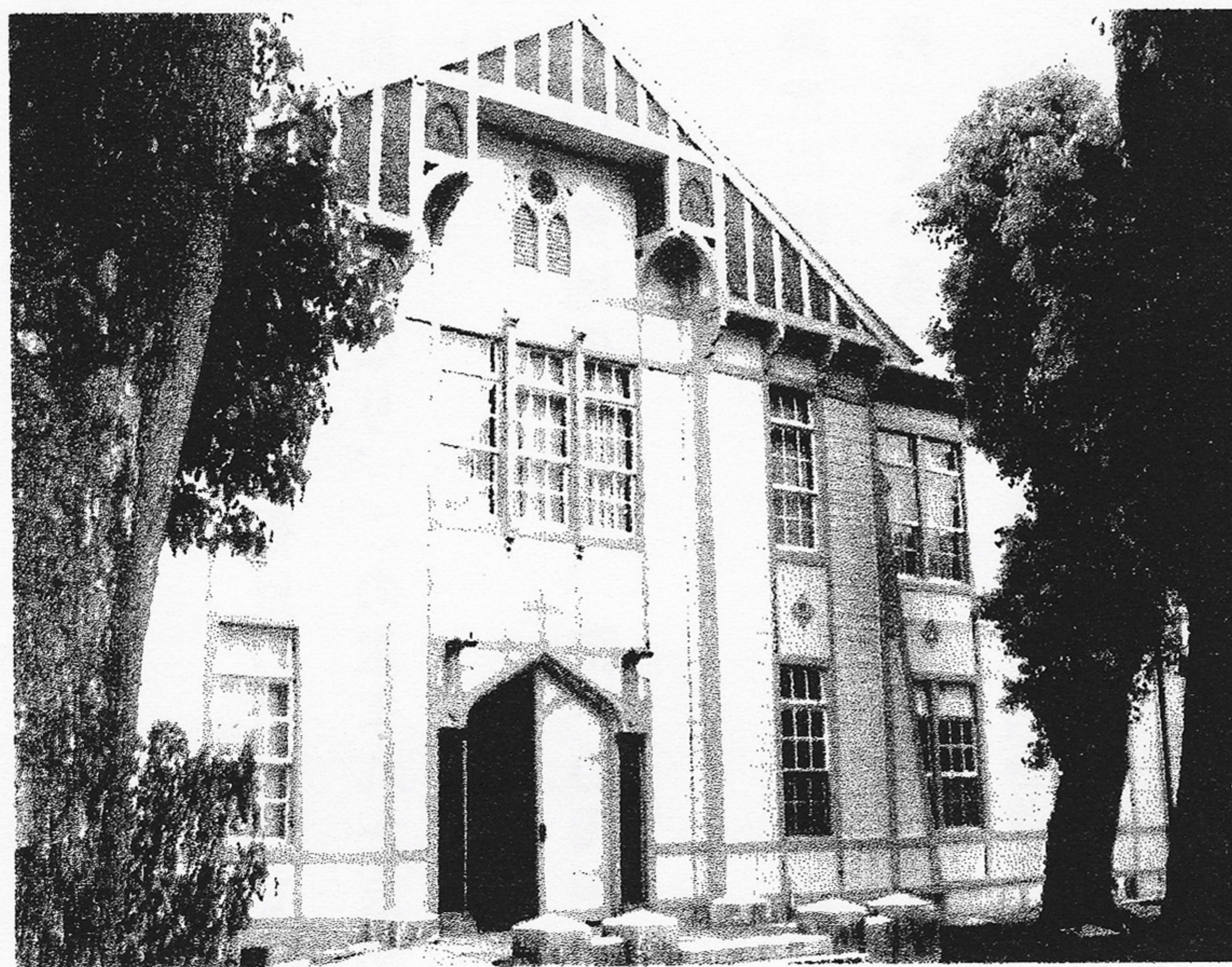


◆ 群馬大学工学部同窓記念会館（国登録有形文化財）

大正五年（一九一六）に創設された、桐生高等染織学校の講堂、及び正面玄関の一部で当時では珍しいモダンなネオゴシックスタイルで薄いグリーン色の外観が印象的。

建物は木造二階建て瓦葺、ハンマービームと呼ばれる独特の屋根構造を持ち館内は殆ど当時の儘の状態で金具、調度品に至るまで当時の姿を残している。

また、教会堂の様に厳肅であり、華やいだ空間を創り出しており、現在は織物の資料等が展示され、桐生織物の近代化と発展に貢献した遺産の一つである。尚、最近では映画のロケにも多く利用されている。



群馬大学工学部同窓記念会館

淨土宗 田中山
榮照院 淨運寺



淨運寺の本堂は、第十五世聞蓮社行譽弁雅上人の代の寛延三年（1750年）に工事を着手し、宝歴三年（1753年）四月五日に上棟式が行われました。

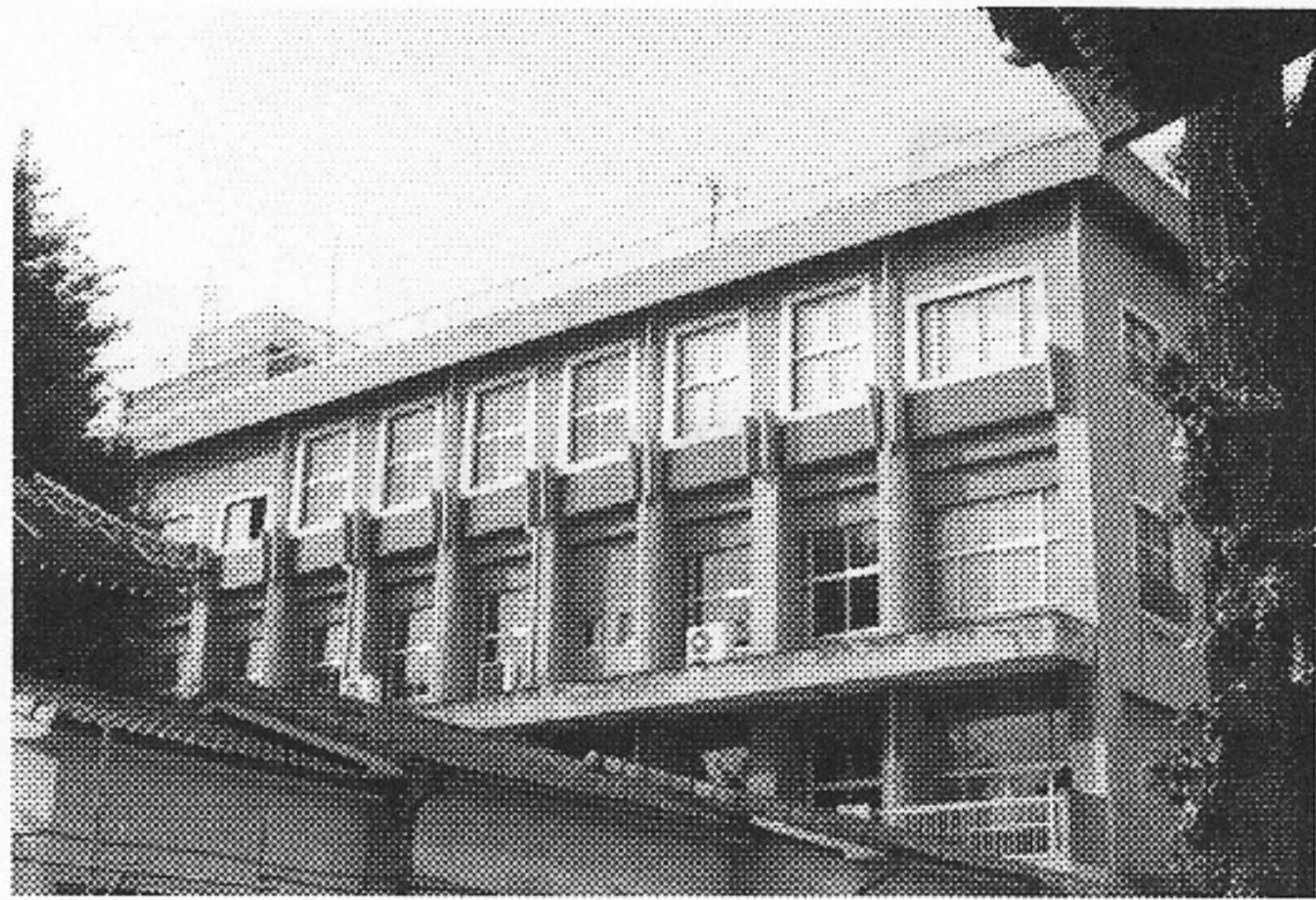
北関東では有数の大きな建物であり、間口十一間、奥行九間の広さで、堂内の欄間の彫物等建築以来二百五十年を経過しています。

このたび平成十一年八月十日付にて、桐生市指定重要文化財（第30号）に指定されました。

御本尊は弥陀三尊の型式にて単慶作と伝えられ、室町以前の作と考えられております。

なお、寺には建築当時の記録が伝えられています。

和順会館



法然上人浄土宗開宗八百年記念事業として建築されたもので檀信徒の信仰増進の道場であり、和を結ぶ親睦の場でもあります。更に幼児の保育と善導を目的とした保育所が併設されています。

和順会館の館名は今上天皇より法然上人に諡号された和順大師の和順をいただいたものです。

一般市民の方にも和順の心をもって御利用いただければ幸いです。

建築内容

1階 保育室 2階 講堂
3階 大会議室（洋室） 4階 和室（広間・ひのき舞台）
保育園分 665.281m² (201.296坪)
会館分 867.533m² (262.491坪)

かんのん堂



1階 かんのん堂 聖観音（子安觀音）
2階 釈迦堂 約3.5mの釈迦涅槃像
3階 和室・浴室
4階 和室
※ワンフロア 約50坪 エレベーター付

二つの茶室

県内ではめずらしく二つの茶室があり、毎年、市の茶会、数年ごとに県の茶会の広場として使用されます。

五ヶ所に炉がきってあります。茶会では寺全体で、最多は十席程使用可能です。

淨心庵

昭和51年建築
四帖半茶室・水屋・待合

狸洞庵

平成4年新宿より移転（大正9年建築）
八帖茶室・三帖小間・水屋・待合

平成7年8月、旧やまねや6丁目店を改修しリニューアルオープン。信仰の場として葬斎場としてまた多目的ホールとして使用可能。

一階の観音様は本町通りの守り本尊、二階の涅槃像（平成10年完成）は圧巻。三・四階では宿泊・お清めもできます。

浄運寺のあらまし

名称 田中山 崇照院 浄運寺

宗旨 浄土宗（ご本尊 阿弥陀如来）

沿革 当初、この寺の名は哀愍寺といい、広沢の後谷の田中田というところにありました。現在の山号である田中山浄運寺の田中山という名はここからきたものと思われます。

1580年前後に渡良瀬川の水害を憂いて、対岸の新宿へ移転し、名称も浄運寺と改めました。

慶長年間に新町の町づくりが始まり、町の北のはじまりには天満宮、南のはしには浄運寺が誘致され、南北を神仏に守ってもらおうという町づくりのため現在地に移転しました。

慶長十年（1605年）4月のことです。

開山 当浄運寺は永祿元年（1558年）正月に創建され、然蓮社靈薦玉念上人により開山されました。上人は、信長公より直々に扇をたまわった浄土宗の高僧です。

桐生地方に浄土宗の寺が進出する足がかりとなつた寺であり、また創建以来火事のないことでも有名です。

行事
5月 3日 花まつり（桐生仏教会共催）
8月 15日 施餓餽会（お盆）
10月 18日 十夜会（東日本最大数珠くり、千塔供養）
12月 31日 除夜の鐘
毎月 1日 朝念佛（法話と念佛会 朝6時 於本堂）
毎月 4日 南無の会（法話の会 夕7時 於観音堂）
毎月 18日 観音様 縁日（子安觀音、人生相談）

文化財
県指定 酒井 抱一 筆「秋草図」
谷 文晁 筆「孔雀図」
市指定 安土宗論
浄運寺本堂
その他 聖觀音像（子安觀音）
聖衆來迎図絵馬 等多数



浄運寺 山門

浄運寺のあらまし

名称 田中山 栄照院 浄運寺

宗旨 浄土宗（ご本尊 阿弥陀如来）

沿革 当初、この寺の名は哀愍寺といい、広沢の後谷の田中田というところにありました。現在の山号である田中山浄運寺の田中山という名はここからきたものと思われます。

1580年前後に渡良瀬川の水害を憂いて、対岸の新宿へ移転し、名称も浄運寺と改めました。

慶長年間に入り新町の町づくりが始まり、町の北のはじまりには天満宮、南のはしには浄運寺が誘致され、南北を神仏に守ってもらおうという町づくりのため現在地に移転しました。

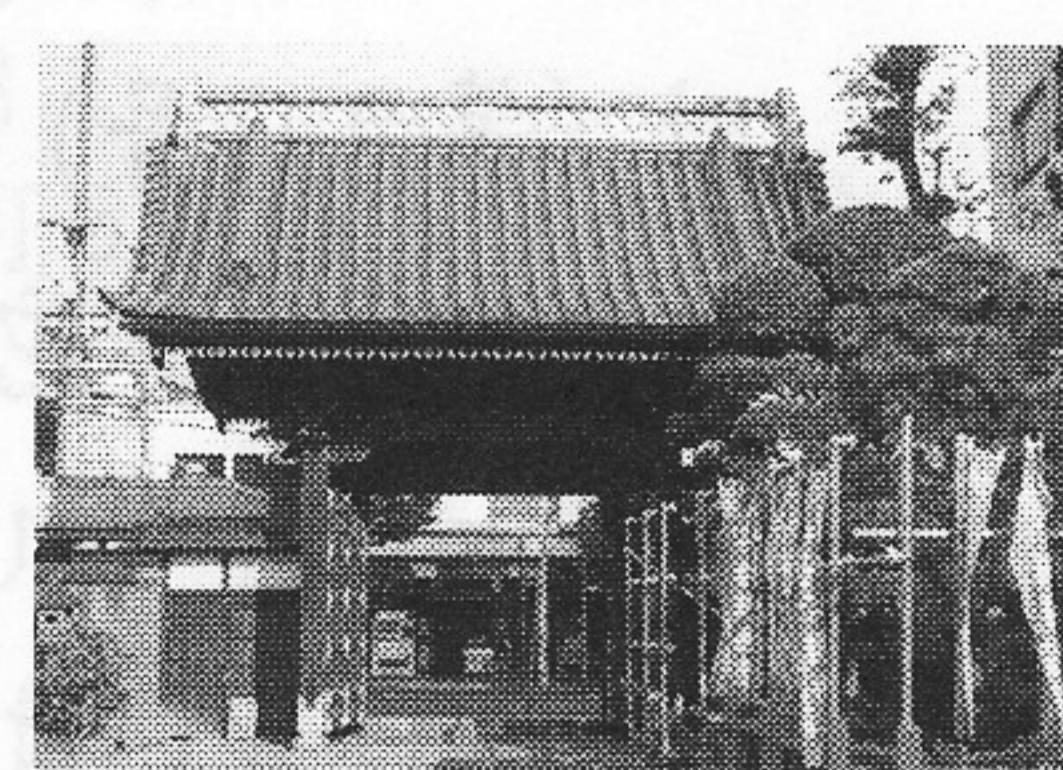
慶長十年（1605年）4月のことです。

開山 当浄運寺は永禄元年（1558年）正月に創建され、然蓮社靈薦玉念上人により開山されました。上人は、信長公より直々に扇をたまわった浄土宗の高僧です。

桐生地方に浄土宗の寺が進出する足がかりとなつた寺であり、また創建以来火事のないことでも有名です。

行事
5月 3日 花まつり（桐生仏教会共催）
8月 15日 施餓餽会（お盆）
10月 18日 十夜会（東日本最大数珠くり、千塔供養）
12月 31日 除夜の鐘
毎月 1日 朝念佛（法話と念佛会 朝6時 於本堂）
毎月 4日 南無の会（法話の会 夕7時 於観音堂）
毎月 18日 観音様 縁日（子安觀音、人生相談）

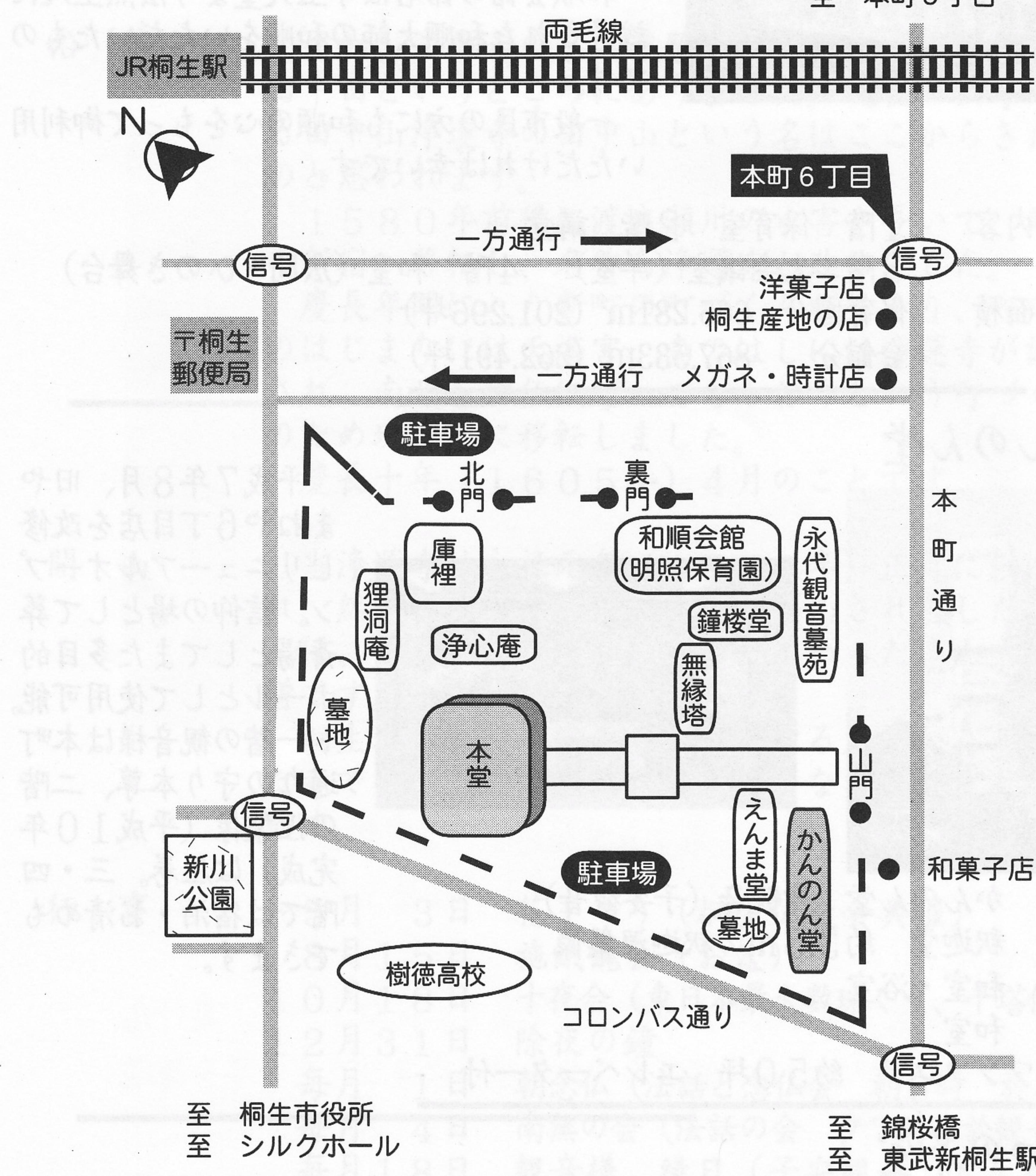
文化財
県指定 酒井 抱一 筆「秋草図」
谷 文晁 筆「孔雀図」
市指定 安土宗論
淨運寺本堂
その他 聖觀音像（子安觀音）
聖衆來迎図繪馬 等多数



淨運寺 山門

浄運寺ご案内図

至 桐生天満宮
至 本町5丁目



〒376-0031
群馬県桐生市本町6丁目398番地

浄運寺

TEL 45-2962
FAX 43-1635

かんのん堂

TEL 46-5360

◆ 天満宮（・天穗日命、菅原道真）

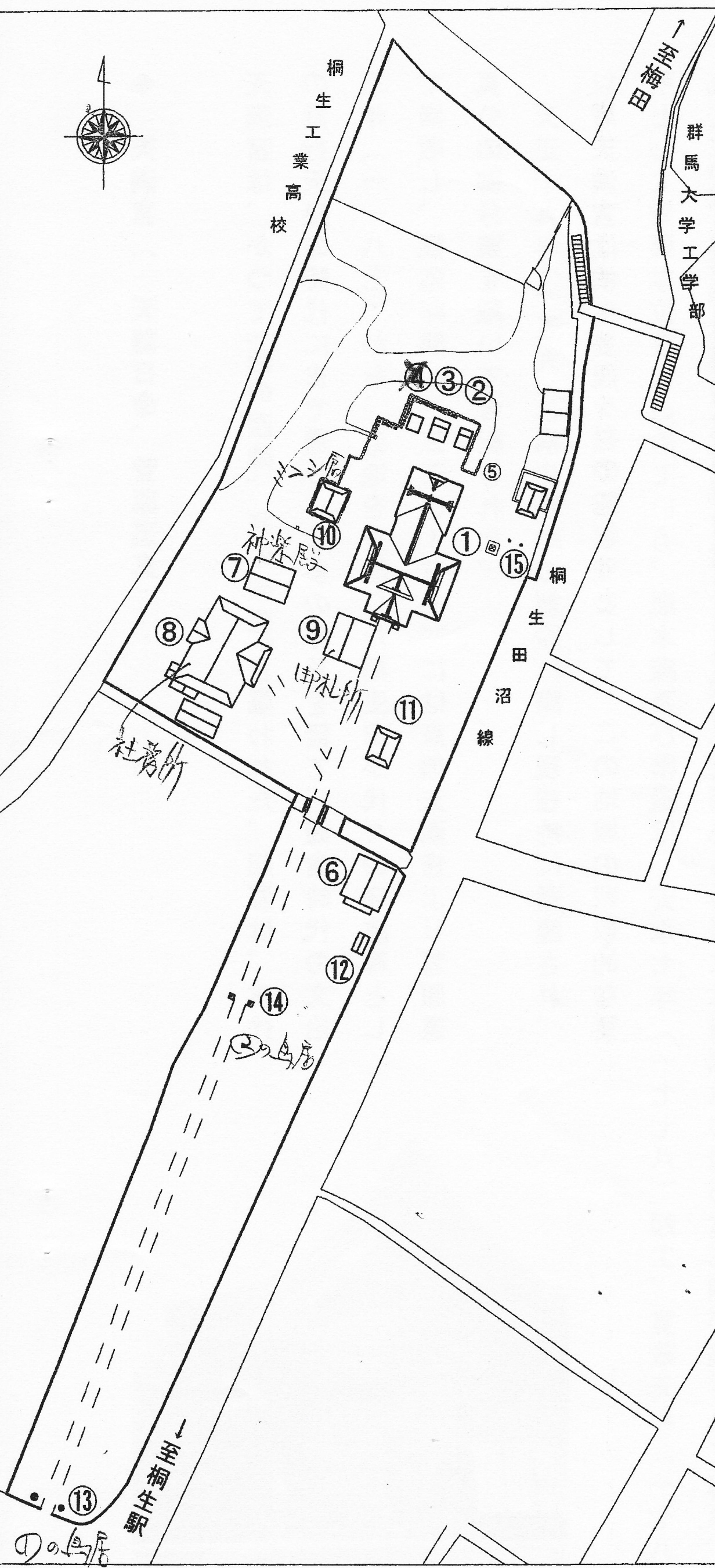
天満宮は、かつて「西の西陣、東の桐生」と謳われた。起源は、古代の景行天皇の時代にまで遡り、幾多の年月を経て、鎌倉時代の文治三年（一一八七）から、当地を支配した桐生家が代々の守護神として崇敬し、観応年間（一三五〇～五一）には京都天満宮より菅原道真公の御分靈を戴いて合祀された。

天正十九年（一五九一）桐生新町の創設に際し現在地に遷座され、以後天満宮は桐生五四ヶ村の総鎮守として、この地域の宗教的な要所として重要な位置を占めている。現本殿及び幣殿は、安永七年（一七七八）起工、寛政元年（一七八九）に落成し彫物は関口文次郎有信による物で、七面ある外壁には極細色の精巧な彫刻が施されており、内部にも彫刻と壁画も描かれ、社殿と見事に調和している。

社殿背後にある、銅板の小さな末社春日社殿は天正から慶長年間のお社とされ、市内最古の建物として市指定重要文化財になつていて。現天満宮社殿も一〇〇年以上経ち、本殿・幣殿の屋根等損傷著しく、平成十五年より十七年まで二年を要し、本格的修理を施した。尚毎月第一土曜には北関東一を誇る天満宮骨董市が開催され参道には沢山の出店で賑わいを見せている。

/





①	天満宮社殿	間口 3.65m	奥行 4.17m
②	本殿	間口 3.64m	奥行 7.04m
③	幣殿	間口 11.15m	奥行 5.75m
④	拝殿	間口 2.15m	奥行 2.76m
⑤	春日社	間口 2.76m	奥行 3.36m
⑥	赤城社	間口 2.18m	奥行 2.64m (基礎)
⑦	機神社	間口 3.50m	奥行 5.30m
⑧	神樂殿	間口 6.60m	奥行 8.70m
⑨	神明宮直日神社	間口 5.10m	奥行 7.30m
⑩	神明宮直日神社	間口 16.90m	奥行 11.90m
⑪	授与所	間口 7.45m	奥行 6.75m
⑫	御輿倉	間口 5.10m	奥行 5.80m
⑬	手水舍	間口 4.30m	奥行 5.40m
⑭	鳥居 (石造) (大正12年)	間口 2.20m	奥行 3.60m
⑮	鳥居 (石造) (正保3年)	間口 4.77m	高さ 6.57m
⑯	鳥居 (石造) (正保3年)	間口 3.44m	高さ 4.27m
⑰	直日神社鳥居 (石造)	間口 2.15m	高さ 3.15m

天満宮境内配置図

◆ 坂口安吾 明治三六年（一九〇六）～昭和三十年（一九五五）

新潟県の生まれで、坂口家は旧家で大地主、父、仁一郎、安吾はペンネームで本名は炳吾、少年時代から自由奔放で新潟中学を一年で落第、翌年東京の豊山中学校を卒業、その後代用教員、大正十四年（一九二五）東洋大学哲学科に入学、また、アテネ・フランスセに通い、梵語・フランス語を習得し、昭和五年（一九三〇）卒業後、同人誌“言葉”を創刊する。

戦後は大宰治・織田作之助らと共に無頼派と呼ばれる、昭和十五年（一九四〇）現代文学に参加して小説・エッセイ・評論等を精力的に書き続け傑作を多く残した。昭和二十七年より桐生市本町二丁目の、書上家に来往、桐生通信を書く等したが、昭和三十年二月脳溢血で四十八才にて桐生市で没した。



坂口安吾



安吾の作品（年令数え）

1930	24	同人誌	言葉	創刊
31	25	木枯の酒倉	風博士	黒谷村
38	32	吹雪物語	長編	
42	36	日本文化私観		
46	40	白痴	墮落論	
47～48	41～42	不連続殺人事件		織田信長
50	44	安吾奇談		
52	46	夜長姫と長男		
55	49	狂人遺言		

◆ ノコギリ屋根

糸ヘンは紡績産業の纖維産業を言う。且つて西の西陣・東の桐生と云われた桐生市は本町通りを中心に、ノコギリの歯の様な、ぎざぎざしたノコギリ屋根の建物が今でも数多く散在する。

此れは明治から昭和初期に建てられた織物工場の跡で、屋根の北側には採光用の窓が並ぶ。建物は木造の他、煉瓦・大谷石造りと様々で、糸ヘン景氣で賑わったのは昔の事、鋭い牙を思わせるノコギリ屋根も纖維産業の衰退が、再開発により十数年前から一〇〇棟近くが解体された。

現在工場は一般の会社倉庫の他、芸術家が集まる工房・パン屋・和菓子屋として活用され、桐生の伝統を守っている。

◆ 桐生祇園“翁藏”

翁鉢は文久二年（一八六二）に完成しました。頭は頼朝ヨシマサ、面は翁である事から翁舗と呼ばれ、此々翁藏に収納展示されています。天下泰平、五穀豊穰を祈願した能の“翁”の人形が典型的江戸型山車の流れをくみ、二層の四方幕と三味線胴というものです、尚翁藏は平成十八年夏に建設された。



桐生からくり人形芝居館



桐生市は古くから織物の町として知られ、今も路地裏には象徴的なノコギリ屋根の建物が残っている。かつては街中を用水路が縦横に走り、数多くの撚糸用水車（下掛け）が連なり回わり、米搗き・粉挽き水車もありました。

その水車の動力をを利用して、江戸時代後期、桐生の惣鎮守天満宮の御開帳に「飾り物」とよばれたからくり仕掛けの見世物・人形芝居が登場した。

明治27年の御開帳には、浅草の竹田縫之助が活き人形からくり芝居を興行した。活き人形とは、文字通り生きているかのようなリアルな表現の人形で、縫之助は大阪道頓堀で人気があった「竹田からくり」の竹田出雲の末裔である。大正5年あたりから水車による動力を電動式に変え、その後昭和36年を最後に途絶えたが、平成11年に復活した。

現在は「桐生からくり人形芝居館」（桐生市本町・有鄰館内）において、出し物は「曾我兄弟夜討」「巖流島」「忠臣蔵」を上演し、そのほか、館内に「宇治川の先陣」「吉祥寺恋之緋桜」「助六由縁江戸桜」「羽衣」「牛若丸と弁慶」の人形と関係資料などを展示している。

竹田からくり系統の桐生からくり人形芝居の特徴は、活き人形（高さ約40cm）・織物の町らしい豪華な衣装・機織機づくりの技を活かした精巧なメカニズムにある。



（有）矢野蔵群　（代表取締役社長）　矢野　義和

有鄰館(矢野蔵群)は、享保2年(1717年)現在の株式会社矢野本店の創業者である近江の商人、初代矢野左衛門が近江から来住し、二代目九左衛門が寛延2年(1749年)現在地に店舗を構えて以来、桐生の商業に大きく寄与してきたその土蔵等の建物群の名称です。また「有鄰」とは、孔子の「徳孤ならず必ず鄰あり」という故事から引用した言葉で、かつて矢野商店が製造していた醤油と酒の商品名でもあり、今もこの言葉は社訓となっています。

現存する土蔵や煉瓦蔵は酒類・味噌・醤油などの醸造を行っていたところで、明治・大正期の建物群です。それらは桐生新町の往時の姿を今日に伝えており、なかでも煉瓦蔵は桐生市内の煉瓦建物としては最も規模が大きく、近代化遺産のひとつとして注目されています。

林立する蔵の風情を保存しながらそれを活用するため、また景観を活かし、桐生新町の町並み保存の拠点として桐生の文化振興に一役担うため、平成4年2月に有鄰館運営委員会を発足させ、同敷地と建物(店舗・店蔵部分を除く)を借り受け管理運営を行っていました。その後、矢野商店から店舗店蔵部分を除く建物が桐生市に寄付されたことから、平成6年10月14日に市指定重要文化財となりました。

この歴史的建造物は、平成5年度から4か年事業で国土庁の「地域個性形成事業」により活用に向け改修整備が行われ、平成9年4月から文化発信の拠点として再スタートをきりました。



本町一丁目にて小屋掛け公演（平成15年3月）



水車公演（平成15年 桐生天満宮にて）

移動舞台公演

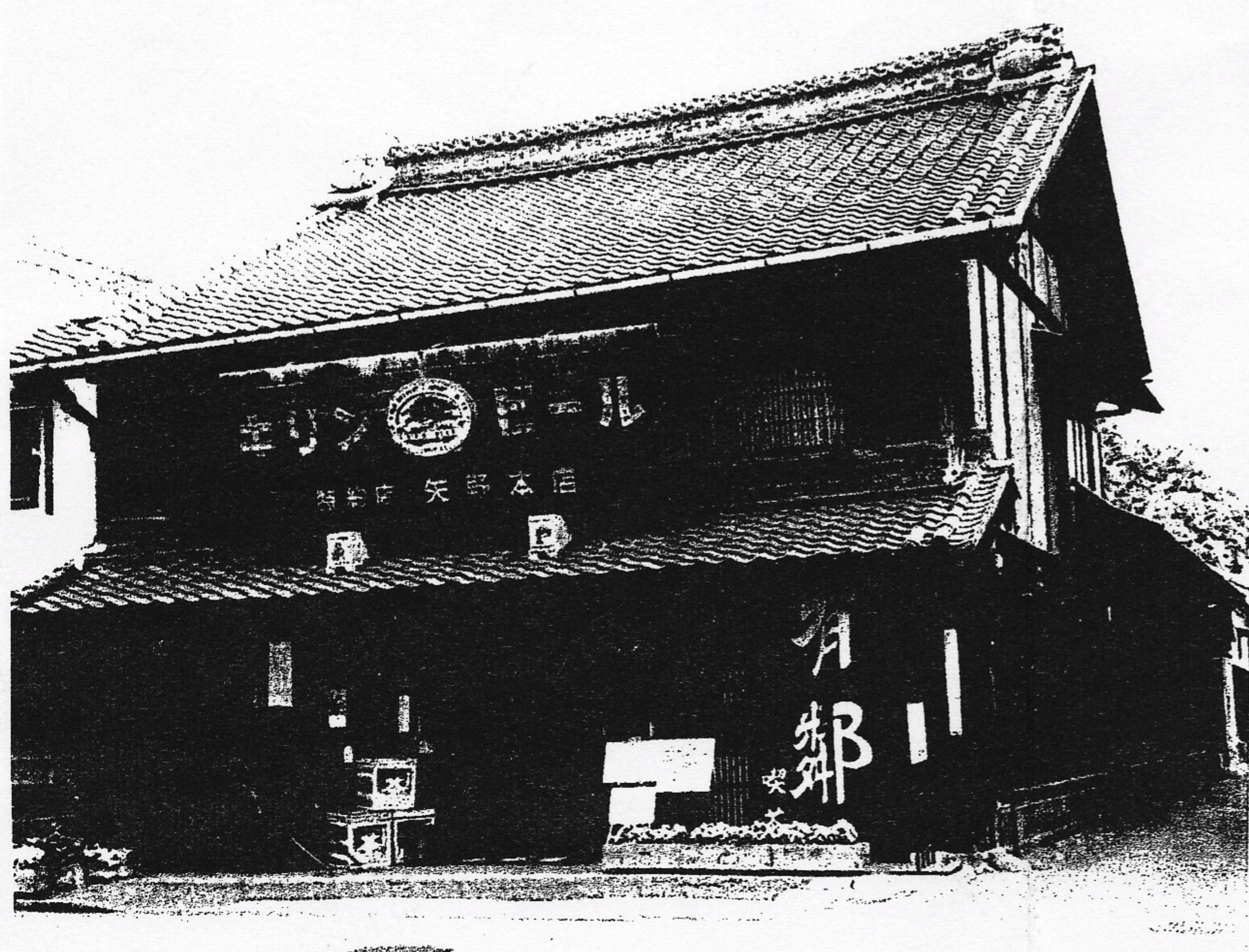


桐生西宮神社「えびす講」



NHK生中継「ふるさと一番」

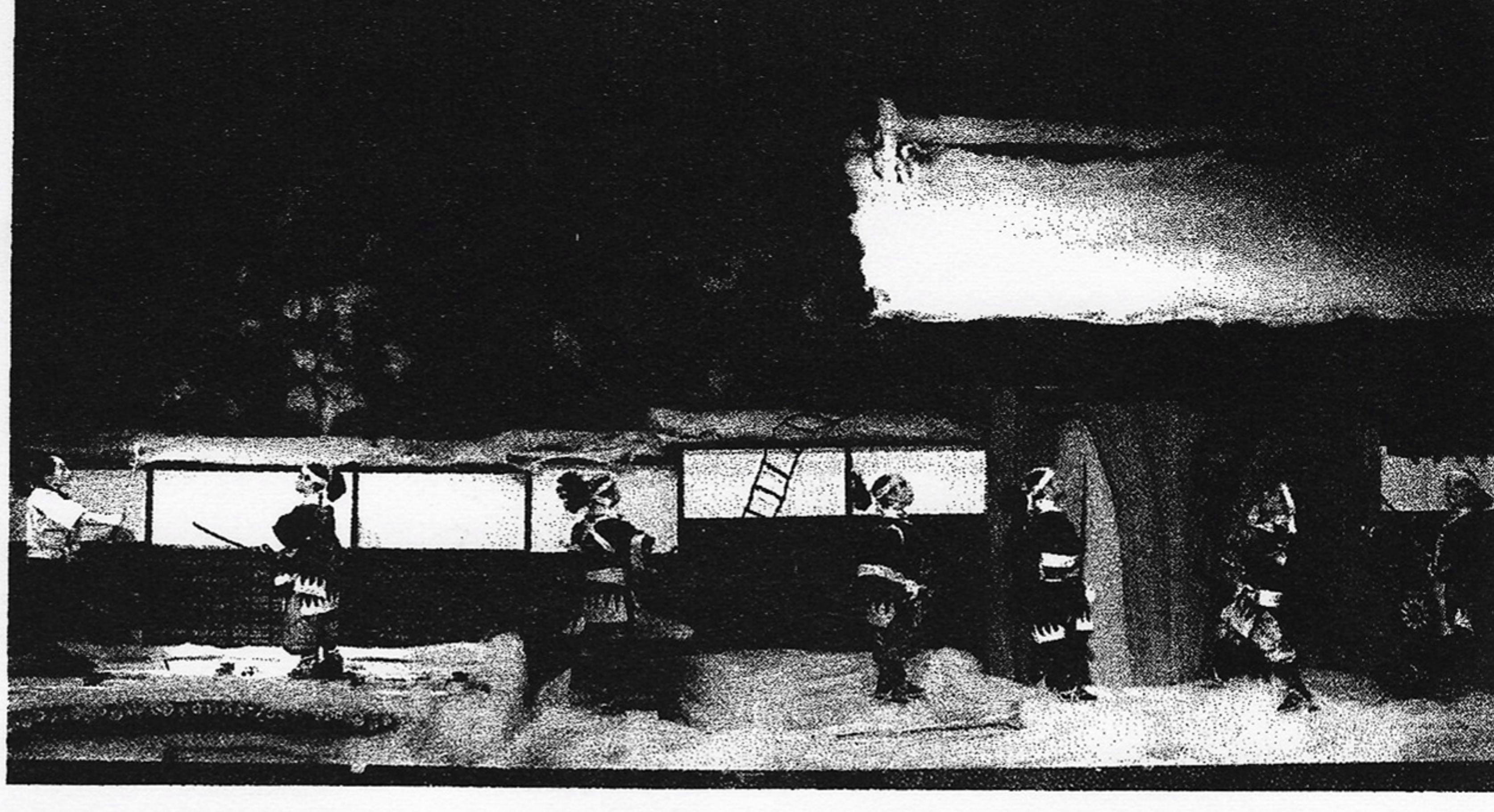
群馬県庁、桐生市役所、桐生糸や通りいらっしゃいませ
イオンモール太田、西宮神社(兵庫県)、日立市博物館等





忠臣蔵義士討ち入り

「忠臣蔵」は昭和3年と27年の「義士討入」の2回、本町一丁目で興行しました。場面は吉良邸門前、縄梯子をかけて掛け矢で開門する一場と、吉良邸での戦いの二場となって います。堀部安兵衛と清水一学との決闘場面が見ものです。



羽 衣



天空高く舞いあがる天女



羽衣は、昭和36年御開帳にて、天満宮で上演。



吉祥寺恋之緋桜



「吉祥寺恋之緋桜」は昭和36年、本町五丁目で興行しました。江戸本郷にいた八百屋の娘お七は、大火の際に避難した寺で、小姓の吉三郎と恋仲となつたのです。再会したい一心で放火し、櫓の上で太鼓を鳴らすまでの場面です。



巖流島



「巖流島」は昭和27年、天満宮の境内で興行したものです。物語りは剣客佐々木巖流名を小次郎と宮本武蔵とが豊前の船島に於いて、巖流は3尺余の太刀を取り、武蔵は木剣をもって戦い、巖流を討ちます。

○ 五条橋(牛若丸)



五条橋（牛若丸）は、昭和27年御開帳にて、本町二丁目が上演。

○ 宇治川戦陣

「宇治川戦陣」は昭和3年天神町の出し物でした。天満宮境内で興行しました。

約20数体の人形があったと思われますが、義経と弁慶他武者3体と馬1体が現存しているのみです。





曾我兄弟夜打ち



「曾我兄弟夜討」は桐生本町四丁目の出し物でした。昭和3年と27年、36年の3回にわたって興行しました。

物語は建久4年の富士の巻狩りに兄十郎と弟五郎とが、父の仇を果そうと工藤祐経の宿舎を襲って本懐をとげる場面です。メカニックは精巧で、織物の技術が最も良く生かされています。



虎午前の導きで、屋敷に潜入(第一場) 祐経の寝所で本懐をとげる(第三場)



助六由縁江戸桜



「助六由縁江戸桜」は昭和27年、本町三丁目で興行しました。助六、実は曾我五郎時敦は養父祐信の刀「友切丸」を奪い返すため、三浦屋に足しげく出入りし、髭の意休の腰の物が「友切丸」と知り喧嘩を売ります。花魁揚巻が仲裁する場面です。

桐生織物の歴史

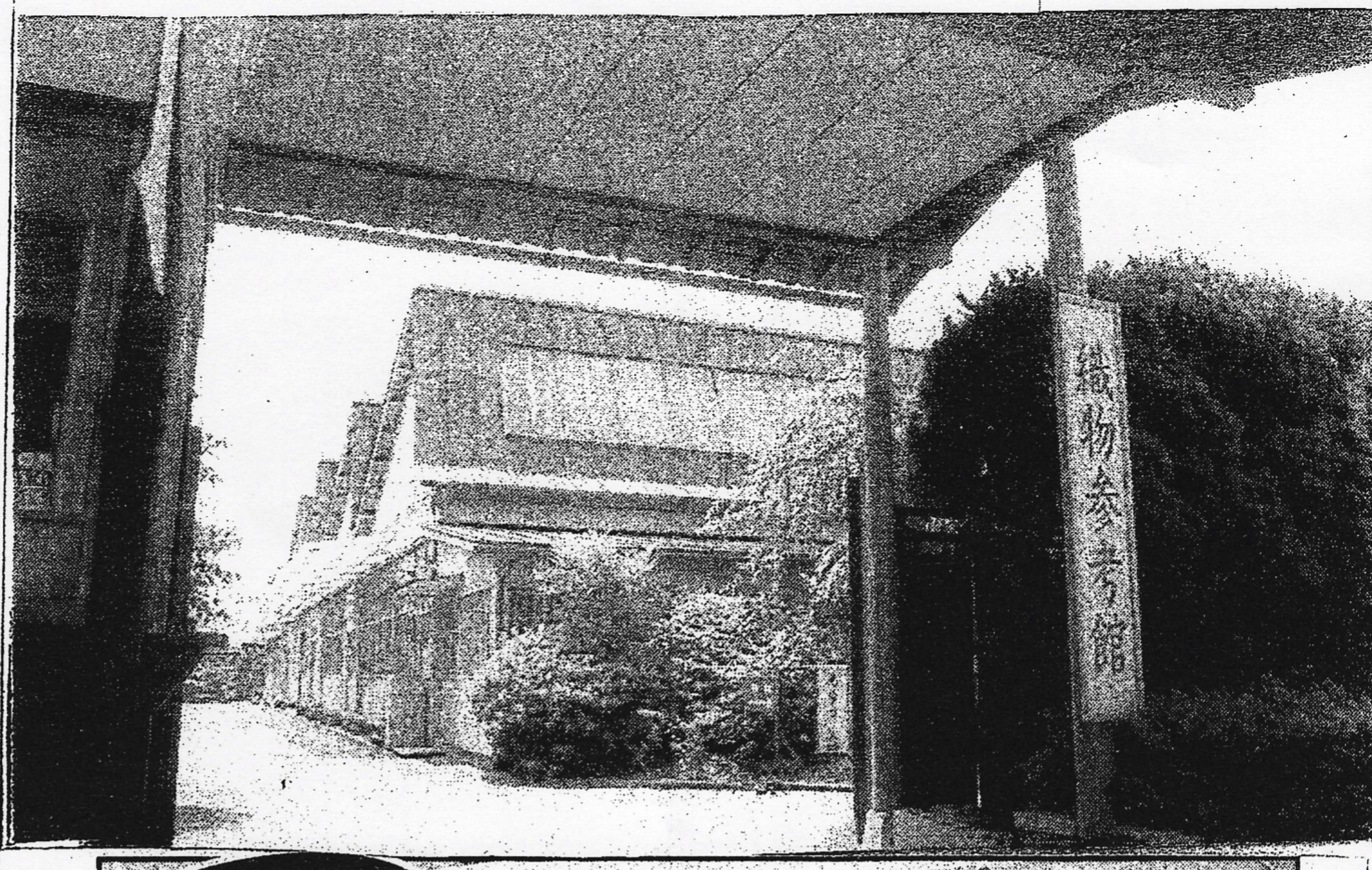
織物産地としての桐生織物の歴史は古く、その始まりは今から1300年も昔、朝廷に仕えていた山田の男子が、養蚕や機織りに優れていた官女「白滝姫」に恋をし、故郷に連れて帰ってその技術を伝えたのがはじまりといわれています。

その後、「桐生」の名は全国的に知れ渡り、「西の西陣、東の桐生」と言われるまでになりました。

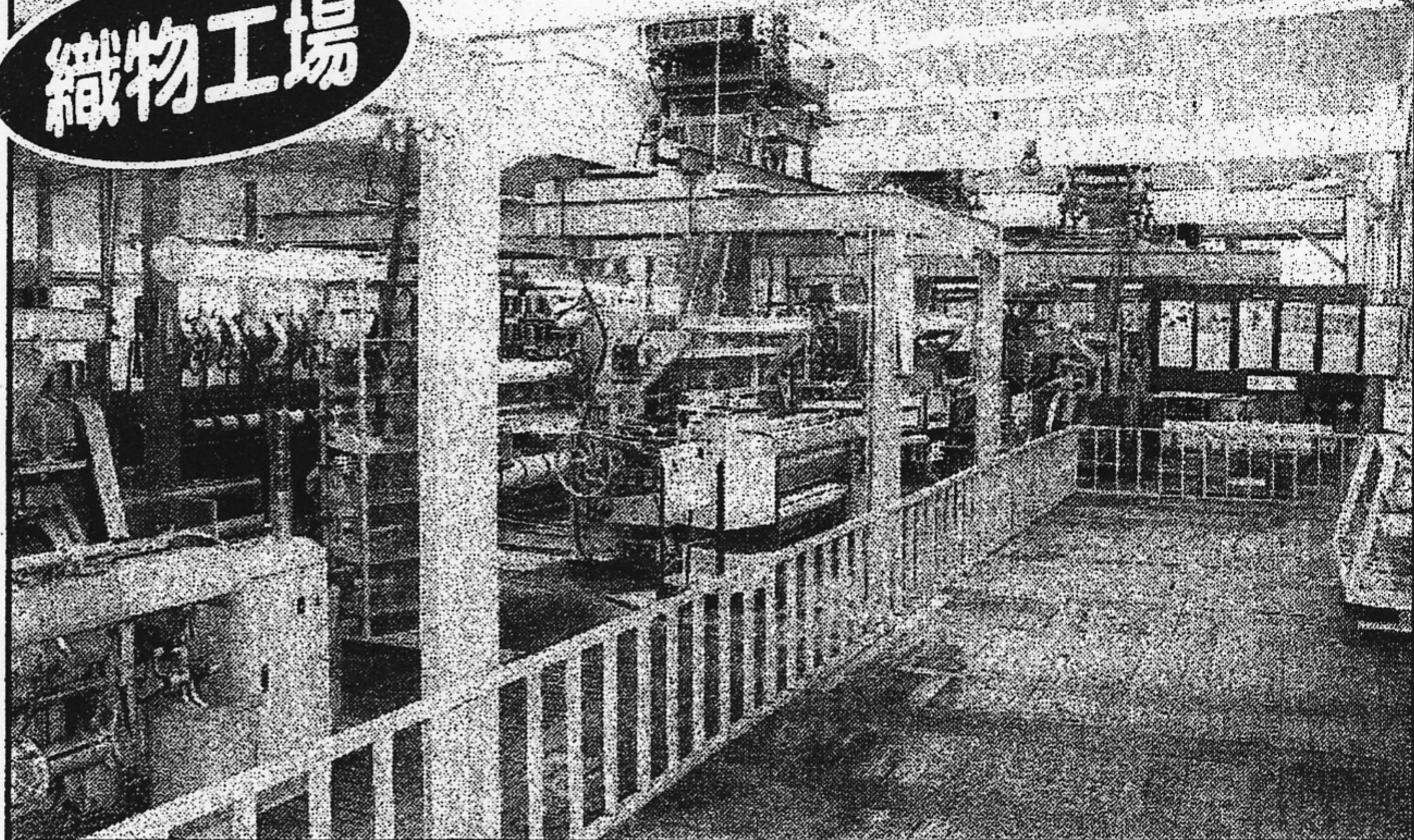
そして、明治の頃には、ジャカード機など当時の最先端技術をいち早く導入し、近代的な生産体制を確立することによって、世界でも指折りの織物産地に成長しました。

時代	西暦	内 容
奈良	749年	正倉院御物収納。(あしぎぬを収める)
鎌倉	1333年	新田義貞の軍旗に仁田山紬が使われる。
室町	1575年	足利義輝將軍より絹織物注文がくる。
安土 桃山	1600年	関ヶ原合戦に徳川方に旗絹2410本を収める。
	1615年	絹市を天満宮で開く。
江戸	1742年	江戸、京都より大量の桐生織注文がくる。
	1783年	岩瀬吉兵衛、八丁撚糸に水車動力を取り入れる。
	1838年	金子善衛門、縞縮緬を作り、將軍家斉に献上する。「お召」の名称となる。
	1860年	幕末期、絹ハンカチを輸出する。
明治	1869年	買繼商、小野里商店が開業。
	1877年	後藤定吉、黒縞子・楊柳縮緬を製織する。
	1879年	森山芳平、化学染色法を学び宣伝販売する。
	1880年	成愛社設立、近代設備で縞子の生産する。
	1887年	日本織物会社設立。(マニファクチュア誕生)
大正	1916年	飯塚春太郎オーストラリア向け、スパンクレープ製織。
昭和	1977年	「桐生織」が伝統的工芸品に指定される。
	1985年	コンピューター利用の紋織物生産を開始する。

織物参考館 “紫” ゆかり

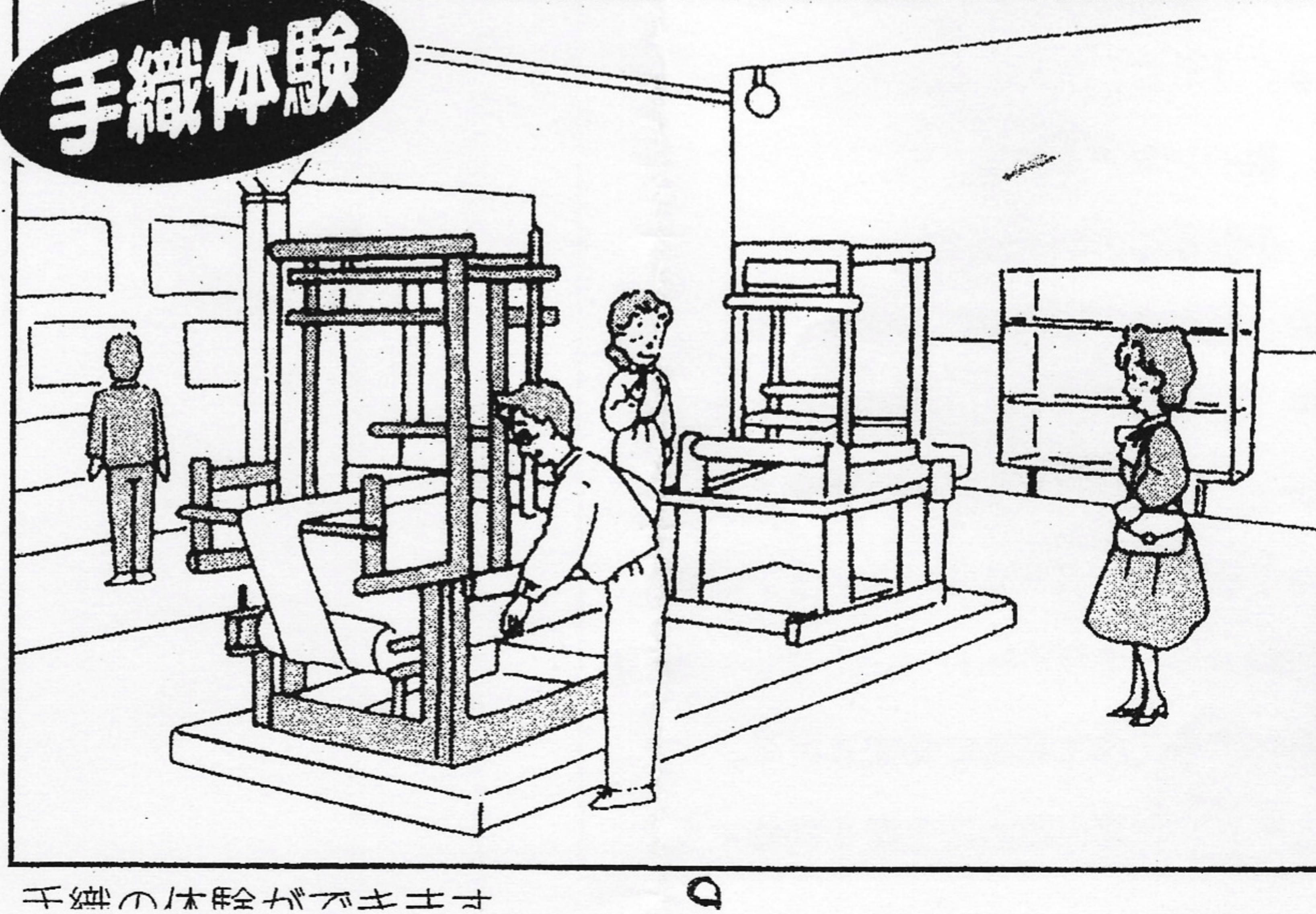


織物工場



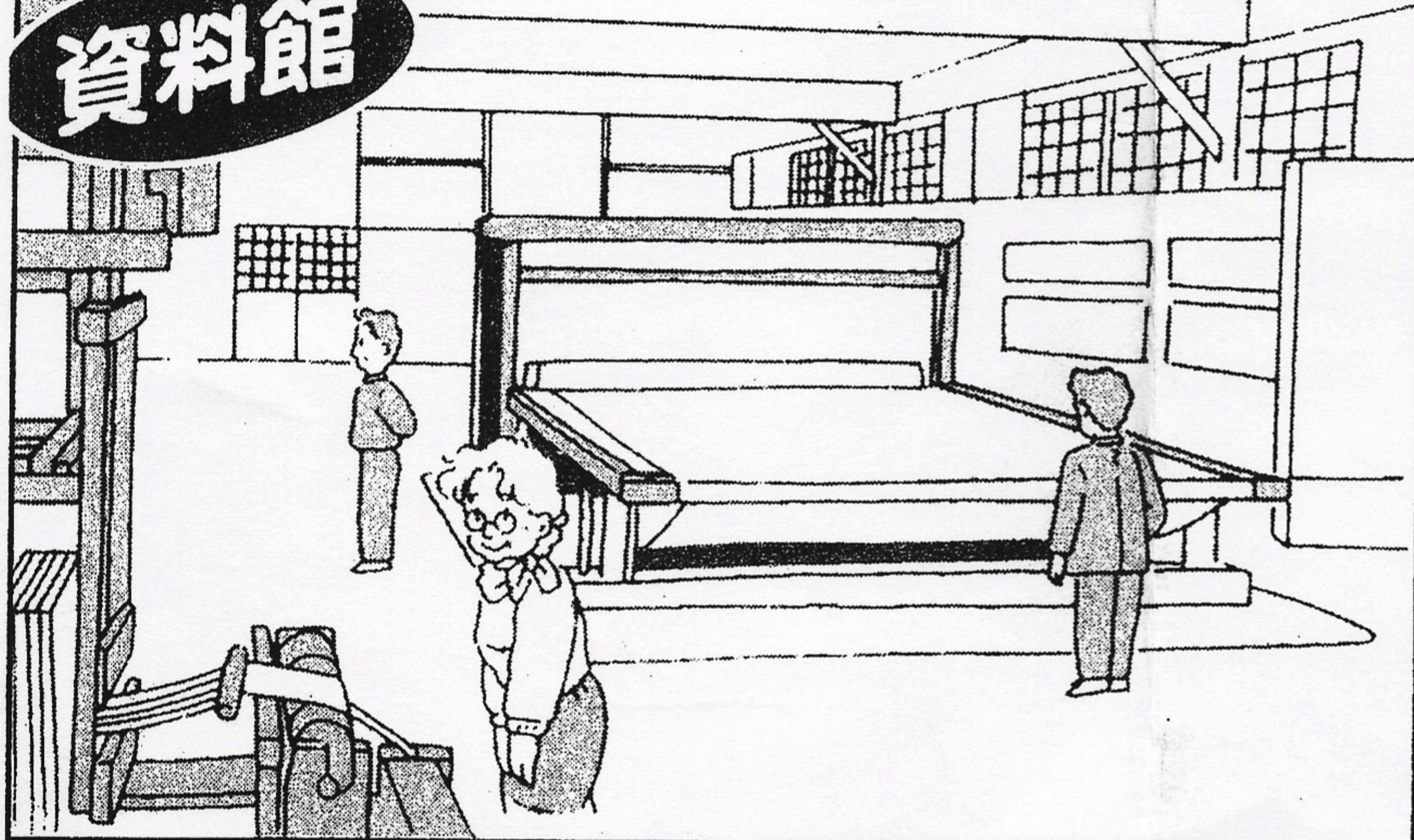
コンピュータージャガードを使用してカレンダーなどを織って
おります。

手織體驗



動く、さわれる、生きている

「織都」桐生の歴史を守るために、明治から昭和にかけて使用された織機や道具、資料約1,200点を展示するとともに織物工程を一堂に展示しており、桐生の織物、染色に関する学習の場としています。



明治・大正・昭和にかけての資料、約1,200点を展示。日本一大きな高機が自慢。



藍染・植物染が体験できます。手織教室では、テーブルセンター、帯、着物などを織ることができます。

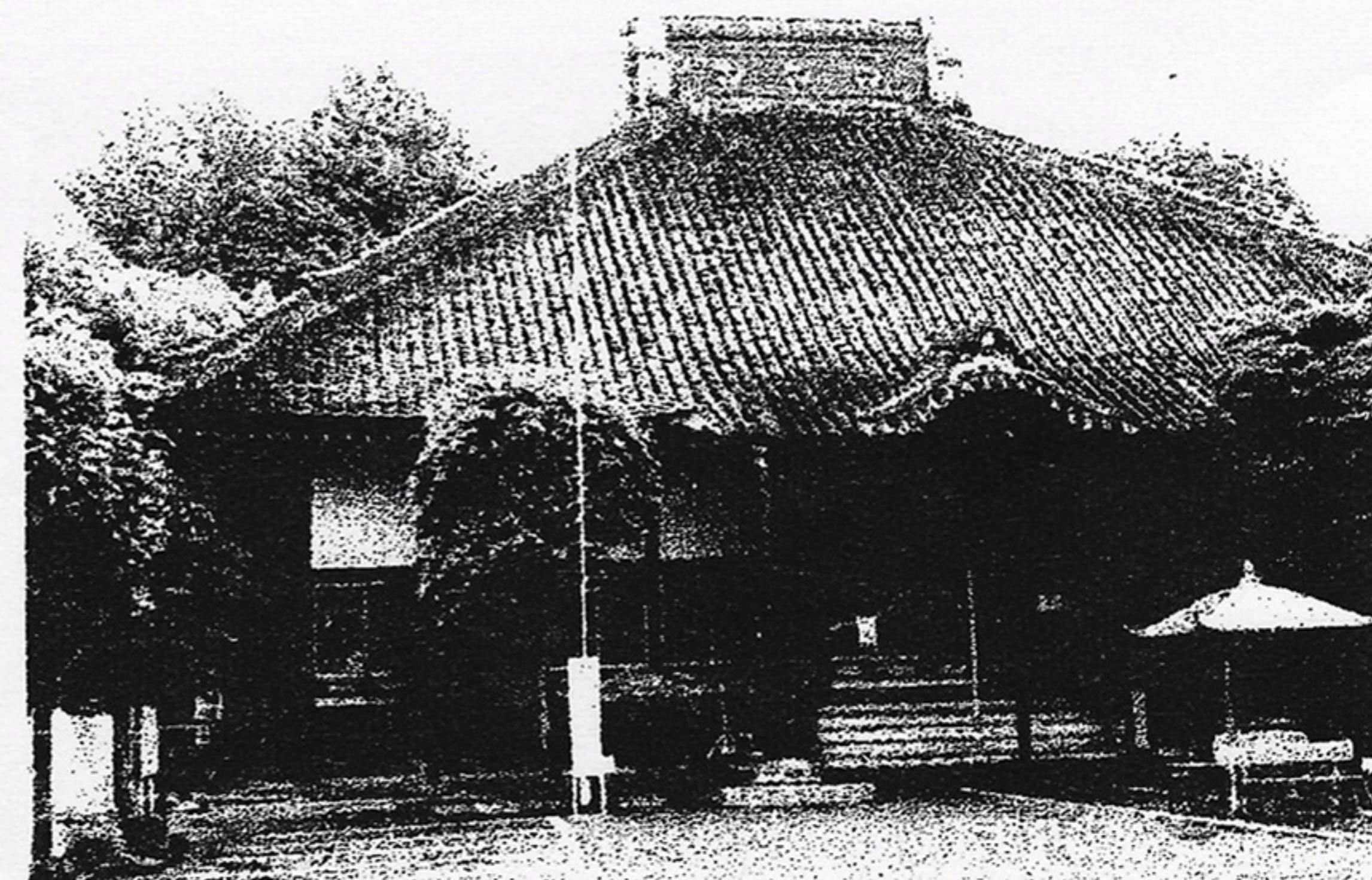
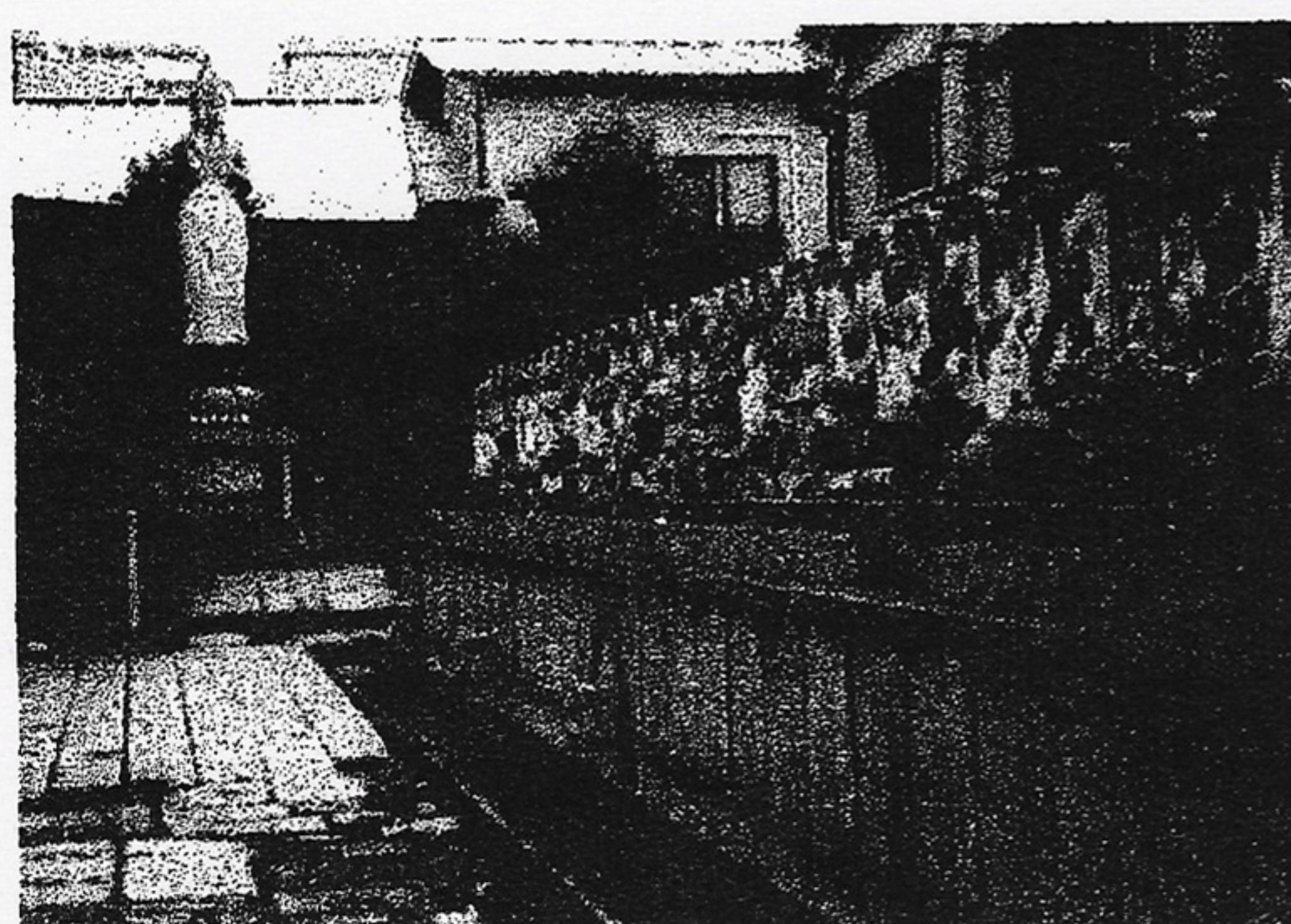
◆ 淨運寺

田中山栄照寺と号し、淨土宗は弁長の鎮西流に属する。御本尊は阿弥陀如来で単慶作と伝えられ、室町時代以前の作と思はれる。開山は永祿元年（一五五八）正月で然連社靈譽念玉上人により哀愍寺が創建された。

上人は、信長公より直々に“扇”を賜つた淨土宗の高僧である。天正年間の一五八〇年頃渡良瀬川の対岸に新宿村が開拓され移転し聞峯二世上人により淨運寺と改める。

慶長十年（一六〇五）町の北に天満宮、南に淨運寺が誘致され、南北を神仏に守られるという町造りの為、現在地に移転した。現本堂は宝暦三年（一七五三）四月の建築で堂内の欄間の彫物等も二六〇年を経過し、北関東では有数の大きな建物である、また、創建以来火事の無い事でも有名である。

尚、文化財として県指定、酒井抱一筆「秋草花図」谷文晁筆「孔雀牡丹図」市指定「安土宗論記録」文書、淨運寺本堂が重要文化財になつてゐる。また、境内の墓地には、桐生の著名な文化人や織物業者の墓が多い。



参考資料

桐生市紹介 桐生市役所

桐生本町まち歩き マップ

からくり人形芝居 パンフレット

織物参考館“柴” パンフレット

群馬大学工学部 パンフレット

淨連寺 パンフレット

坂口安吾 日本大百科全集小学館

天満宮社殿 宗教法人天満宮発行



